

◇その人らしい生き方を支えるまちづくり

掛川市では「希望が見えるまち」「誰もが住みたくなるまち」の実現を目指し、「教育・文化」「健康・子育て」「環境」の3つの日本一を目標に掲げ、協働によるまちづくりを進めている。

近年、家族のあり方やライフスタイルの変化等により、市民の生活や健康を取り巻く環境も変化している。多くの市民の願いでもある住み慣れた地域で安心して暮らせるまちとするために、掛川型の地域包括ケアシステムとして、多種施設の集う「希望の丘」や在宅における総合支援の地域拠点である地域健康医療支援センター「ふくしあ」(以下ふくしあ)を整備し、地域住民と専門職、行政等が手を携えたまちづくりを行っている。

昨年、市議会発議による「掛川市健康医療基本条例」が制定され、その実現に向けて健康長寿を目指す、「かけがわ生涯お達者市民」推進プロジェクトを進めており、これからの生き方を考えていく環境づくりに取り組んでいる。

・「かけがわ生涯お達者市民」推進プロジェクトと「私の人生設計ノート」

健康づくり事業と介護予防施策の取り組みに連続性を持たせ、市民総ぐるみで健康増進を進め、「お達者度」(要介護2未満の状態)の向上を図る。また、生き方を選び、それぞれの人生の質を高めるために意識啓発的な要素も含めた健康増進編とエンディング編で構成されている冊子を作成し、希望者に配布している。

・健康意識の向上へのアプローチ

「ふくしあ健康相談・健康講座」や「ふくしあだより」等を利用して、あらゆる世代に対して、健康づくりや、介護予防のための啓発活動を行い、地域の関係機関や市民団体との連携による多様な地域活動を通じて、住民とのつながりを深めている。

・希望の丘と地域リハビリテーションに関する協定締結

中心市街地に程近い旧病院跡地に様々な施設機能を集約化し、医療・保健・福祉・介護・教育の中核ゾーン「希望の丘」を整備した。希望の丘内にある掛川東病院と協定を締結し、リハビリテーション専門職が市内における健康活動、介護予防などの運動や動作、知識取得等に関する支援を年齢や状態にかかわらずサポートを行っている。

◇地域健康医療支援センター「ふくしあ」の取り組み

ふくしあは市内5箇所に設置され、医療・保健・福祉・介護の専門職が集い「在宅医療

支援」「在宅介護支援」「生活支援」「予防支援」の4つを柱に、多職種で情報共有や連携を図ることにより、地域、市民の抱える心配ごとなどに迅速かつ的確に対応している。

ふくしあの基本構成団体は、在宅医療・介護の中核サービスの1つとなる訪問看護ステーション、見守りネットワークの構築や地域の育成を行う社会福祉協議会、高齢者の総合支援を行う地域包括支援センター、そして、全体のコーディネートと制度の運用を行う行政の4団体で構成されており、それぞれが専門的な業務を行いながら、年齢や症状により垣根のない支援を行っている。

民間のノウハウと行政の力を合わせて活動する、「半官半民」の総合力であり、対象者個人だけの支援ではなく、様々な問題を抱えた家族を含めた支援が可能となっている。

平成28年度ふくしあの活動は相談件数32,194件、ケース会議等2,298回、地区活動支援2,842回、健康支援活動416回、訪問看護等34,431件となる。このような取り組みもあり介護の認定率や重度化が抑えられる傾向にある。

現在、これまでの様々なふくしあ活動について有識者にも協力してもらい、エビデンスの確立に取り組んでいる。今後、まちづくり協議会と連携を深め、エビデンスに基づいた活動を展開し、市民の意識向上、地域力の育成を図る。

◇今後のまちづくりの方向性について

掛川市は「報徳の精神」と「生涯学習の理念」が息づくまちとして、平成25年に市民自治によるまちづくりの最高規範である「掛川市自治基本条例」を施行し、現在、市内全域において、市民主体で地域づくりを進める「まちづくり協議会」の活動が始まっている。

平成17年の合併後、様々な事業の集約化や統合を行ってきたが、医療・介護等の分野については住民により身近なところで一緒に活動していくために、敢えてふくしあを市内の5箇所を設置している。

協働のまちづくりを進めるための基本原則の一つである参画は、子どもの頃から家庭や地域の行事、ボランティアへの参加などによって培われていく。そして個人の問題も地域課題として捉え、地域ぐるみで解決の糸口へと導く力となる。

市民が安心して子どもを産み、育てることができるまちづくりが今後重要であるという市民意識調査の結果も踏まえ、医療や福祉環境が充実した、高齢者や障がい者にやさしいまちを目指し、今後もふくしあを健康づくりの拠点として、まちづくり協議会やNPO等の市民団体と共に、活動していきたいと考えている。